

## 新人フォローアップ研修（他事業所体験）

研修委員会 委員長 高橋 晴美

研修委員会では、新入職員に対し、すずらの会の職員としての役割を自覚すること、支援の幅を広げることを中心にフォローアップ研修を実施しています。その一環として、配属先以外の事業所で1～2週間の体験をする「日中活動事業所体験」を行いました。

すずらの会は児童から成人までの方を対象に様々な支援を行っています。配属先とは異なったサービスを行っている事業所で利用者支援を体験することで、法人が行っている事業について知ることができます。また、他の事業所での支援方法を知ったり、様々な特性を持つ利用者に関わったりすることで、視野を広げたり、支援スキルを向上させることが期待できます。

研修を終えた職員からは、「自分の事業所の役割を改めて考える良い機会となった」「一つの見方にとらわれず、様々

なことを吸収していきたい」といった前向きな感想が聞かれました。秋にはグループホームでの支援の体験研修も企画しています。研修で得た経験を活かし、今までの支援を振り返り、きめ細やかな利用者へ寄り添った支援につなげることができると良いと考えています。



（「ホームの支援体験研修」前の座学）

## 相模原地域交流イベント開催のご案内

### フェスタすずらん2018

日時：平成30年10月27日（土）10時開始

会場：すずらの会 グリーンハウス  
南区麻溝台7-1-7

出演：相模原青陵高等学校 チアダンス部  
キッズダンス Thuganomics（サガノミクス）  
パントマイム シャルル石黒  
トランペット大道芸 タカパーチ



### アート作品展

開催期間：平成30年12月11日（火）～12月15日（土）  
※初日は準備のため12時頃からの開催となります。

会場：相模原市立市民健康文化センター ふれあい広場

### クリスマスライブ

日時：平成30年12月15日（土）  
13時00分開演～15時00予定

会場：相模原市立市民健康文化センター ふれあい広場

### 編集後記

今回の特集記事の取材を行う中で、体制の変更や新しいサービスの提供をする際には、その後の実際の現場での職員・利用者の生の声を聞き、現状の把握を行うことが重要だと改めて感じました。次号もすずらの会における取り組みについて、ご紹介したいと思います。（広報委員会）

ご厚意に感謝申し上げます

（寄付）スリーエムジャパン労働組合 相模原支部 様

掲載させていただいた方々の他にも、年間多くの方からご支援を頂戴しております。（地域活動への招待、授産作業のご紹介、設備品・玩具・本の寄贈など）福祉事業に対するご理解を賜り、ご厚意に深く感謝申し上げます。

# 広報 すずらん

2018(平成30年)

10月発行  
第69号

発行日：平成30年10月1日（平成8年創刊）

発行元：社会福祉法人すずらの会 理事長 松屋 直人 URL: <http://www.suzuran.or.jp>

所在地：〒252-0328 神奈川県相模原市南区麻溝台7-6-4 TEL: 042-745-8080

編集：広報委員会

## 魅力あるプログラムの提供と就職率向上の取り組み

大和市障害者自立支援センター



（就労講座「メモ取り講座」の様子）

大和市障害者自立支援センターでは、就職する上で身に付ける必要のあるスキルについて様々な側面から学ぶための講座やプログラムを実施しています。

月2回実施している就労プログラムは、障害者雇用をしている企業の見学や、ビジネスマナー講座、面接対策や履歴書作成などを行っています。必要なマナーや自分にとっての働くということを考え、就労への具体的なイメージを持つことを目的としています。実際に働いたときのことを想定して、普段は職員が担っている受注管理や朝礼などを体験する疑似業務プログラムを実施したり、作業訓練の中でも自発的に考え、効率よく作業するための改善を提案する経験を積むことを実践しています。

月1回実施しているコミュニケーションプログラムは、職場での振る舞いや、他者との関わりの中で起こりうる場面を想定して、自身に合った対策を立てたり、他者との違いを考えたり、経験を積む機会として行っています。具体的には、他者理解、ストレスへの対処方法、考え方の癖を知るといった内容でグループワークなどを行っています。その中では、自身の意見があるように、他者にも意見があることや、決して他者の意見を否定しないという約束事を決めて行うことで、自身の意見も言いやすくなると同時に、他者の意見を“みんなそれぞれ違うんだ”と受け止める練習になっています。グループワークで発表する習慣をつけることで、大人数の中で自分の意見を話す練習にもなり、このような小さな体験の積み重ねが成功体験につながります。

また、プログラムと並行して月1回は必ず個別面談の時間を設け、ひと月の振り返り、個別支援計画の目標の達成度の確認など、現状と目標のすり合わせを行い利用者の気持ちや希望を聞く機会を設けています。その中で出た希望や疑問を、月1回行っている利用者ミーティングの議題にしたり、センターでの活動内容についても“もっとこうしたい”という意見があれば、みんなで話し合い、試行期間を経て活動内容が変わっていくことも多々あります。充実したプログラムを計画するにあたっては、職員による話し合いや、書籍、研修など、様々な取り組みから素材を見つけ、職員主体で内容を決定することもあります。利用者のニーズを把握することがより重要だと考えています。自分に合った解決方法を、他者と相談しながら自分で見つける過程が、その人のその後の自信につながると考えます。

加えて、月1回余暇活動として土曜プログラムも実施しています。内容は、利用者の希望を聞き、季節に合わせた内容を取り入れています。また、自立支援センターとして行っている幅広い方々を対象とした地域交流イベントと合同で行う大きな行事（花見、バーベキュー、新年会など）では、利用者も運営に携わり、計画立てから実行に移していく過程を体験する機会も作っています。この余暇イベントでは、就労移行利用者や就労者、地域の方との交流があり、身近な就労者の話を聞き、利用者の良い刺激になったり、就労者の息抜きになったりと、貴重な機会となっています。また、就労後もセンターに来るきっかけがあることで、支援者との距離感も近くに感じてくれている方もいます。

このように大和市障害者自立支援センターでは、働く準備の支援とともに就労してからのフォローもしっかり行ってきました。すずらの会では、これまで独自事業として就労者への職場定着支援を行ってききましたが、今年度4月から国のサービスとしての就労定着支援が始まり、この10月からすずらの会3事業所（ワークショップ・フレンド、ワークセンターやま、大和市障害者自立支援センター）で新サービスとして開始します。

長年のノウハウを生かして、企業との懸け橋になれるよう取り組んで参ります。

（取材：広報委員会）

## きめ細やかな サービスを提供するために 🏠

今年度は、サービスの質の向上にむけ行っている職員間の学習ワークや研修など、事業所や各委員会が取り組む内容を特集してご紹介しています。今回はグループホームを運営する事業所ホームすずらんのサービス向上の取り組みについて紹介します。

グループホームは、生活における支援・補助を必要とする障害のある方や高齢者が、少人数（5～10人程度）で共同生活を営む住居および形態をいい、生活における様々な支援を受けながら、地域社会になじみ、家庭と同じように安心して日常生活を送るための住まいです。すずらんの会では、現在10か所のグループホームで約60名の方々が暮らしています。



### （統括世話人の導入）

世話人の通常業務は、各ホームの入居者が在宅する朝と晩の一定時間帯に勤務（一部は24時間）し、食事提供、清掃、備品・設備の維持管理、生活消耗品の購入援助といった住環境に関わる様々な用事の他、日々の健康状態の観察や必要に応じて服薬管理、金銭管理、仕事の悩みや生活全般の対話、日誌の記載など、その業務は多岐に渡ります。

平成28年までは、各ホームに世話人1名、アシスタント2～3名が配置され、常勤職員2名が10のホームを巡回する体制でしたが、日々の支援の中で世話人が助言を求めたい時や困り感を相談したいと感じた際に、上司や同僚のサポートを得られにくい環境にありました。

結果として利用者の要望に対する対応がスムーズに行えないなどのサービスの不十分さや、世話人自身も負担を感じやすいなどの状況がみられたため、昨年29年度より新たに常勤職員の配置を4人に増やし、統括世話人として各ホームにいる世話人のサポートに回れるよう職員体制を変更しました。



（ゲーム大会の様子）

### （統括世話人の役割）

統括世話人としての具体的な業務は、担当する2～3か所のホームを巡回し、利用者・世話人とコミュニケーションを取りながら必要に応じた助言やサポートを行うことです。

この統括世話人体制が導入されて以降、統括世話人一人あたりの担当ホーム数が分散された結果、それぞれの世話人との協力体制が築きやすくなり、それまでよりもきめ細やかな支援が行えるようになったという実感があるとのことでした。また日々の巡回の他、3か月ごとに各ホームで世話人とアシスタントを対象にした研修を行えるようになったことも、支援力の向上につながっていると統括世話人が感じているとのことでした。

加えて、世話人からは、世話人の勤務時間内では難しかった通院支援や、預金の管理支援、さらに利用者の日中活動先や会社で開催するケースカンファレンスへの参加、保護者面談への同席など、その人に関わる方々との連携も取りやすくなったという意見がありました。こうした連携の場でお互い情報提供を行い、ホームでの支援を再検討できるきっかけもなっているようです。

### （現状の把握と世話人からの感想）

昨年9月には、各ホームの世話人を対象に体制変更後の変化に関するアンケートも実施されています。そこでは「利用者のいない時間帯に相談を聞いてもらい、支援の提案などを受けられることができる」「労いを頂きながら、こちらの意見も話しやすい環境を作ってくれている」といった意見をはじめ、統括世話人からの助言やサポートを受けながら支援を行っているという意見が多くありました。各ホームへの巡回頻度や連絡の取りやすさについても、おおむね満足しているという意見であり、体制変更の効果として相談の機会を持つことができるなど、世話人それぞれが自信を持って支援を行えるようになりつつあることが伺えました。

### （利用者の主体性を促す工夫）

こうした職員体制の改善と同時に、日々の生活に利用者の意見を反映させていく工夫もなされています。誕生日会や季節行事などは、利用者の意見を事前に聞いて企画しており、10代～30代の比較的若い年齢の方々が暮らすホームでは、全員が取り組めるカードゲーム大会が行われており、立候補した数名の利用者によってラッピングされた賞品が準備されていました。またホーム内での役割を果たしたり他者に良い関わりをした人に感謝を伝える機会が設けられているホームもあり、日々の暮らしを豊かにする工夫がなされています。

### （暮らしの楽しみ）

また、グループホームで生活されている多くの方々とって、食事は大きな楽しみのひとつとなっています。日々の食事については栄養バランスや各自の食の好みに合わせた献立が提供されていますが、あるホームでは敷地内に農園を作り、そこで数種類の野菜を育てて収穫し、食事として提供する取り組みを行っています。当初は世話人が中心となり育てていましたが、作物が育つにつれて利用者の方々も水やりを行ったり作物の育っている様子を世話人や他の利用者に伝えたりと、積極的に参加する様子が見られるとのことでした。取材した当日も農園で収穫した野菜を使った献立が食卓に並んでおり、利用者からは「野菜は天ぷらにして食べたらおいしかったです、また食べたいです。」と感想を聞くことができました。

こうした利用者側の意見や好みなどを生活に反映させる取り組みは、共に暮らす利用者同士が楽しく関わることのできる機会となります。それにより自然な形で利用者同士に共通の話題ができ、利用者が主体的に役割を担う場面ができていくように思われました。一日の中で多くの時間を過ごすホームだからこそ、こうした楽しみを感じながら、かつ負担なく関わることのできる機会を設定し、共に暮らす上での良い関係性を築く配慮を行うこともまた重要であると感じました。



（グループホーム内の農園）

### （今後の課題）

グループホームの今後の課題としては、以下の2つが挙げられます。

まず第一に、職員それぞれが余裕をもって、サービスの充実に意識を置いて取り組める業務量に調整できるだけの人員の確保です。そのためには統括世話人体制を導入して2年後の今、実際に現場で働く世話人がどういった働き方をしているのか、負担を感じていないかなどの現状を把握することが重要となってくると考えられます。

第二には地震などの緊急災害時において、迅速にホームでの対応を行うためのバックアップ体制および職員配置などの整備が挙げられています。起こりうる事象とそれに伴う被害状況などを想定しながら、行える対応策について精査する必要があります。

利用者の方々が地域で安心して暮らしていけるために、こうしたより良いサービスの検討は欠かせません。体制部分の整備および職員それぞれの意識付けなど、今後もさらに取り組んでいくことが望まれます。

（取材：広報委員会）